

### □講演 3. 樋口正信：植物研究雑誌と隠花植物 Masanobu HIGUCHI: *The Journal of Japanese Botany and Cryptogams*

植物研究雑誌に掲載された隠花植物関係の論文を概観し、本誌が隠花植物の研究にどれだけ貢献してきたかについて紹介したい。

#### 隠花植物とは何か

隠花植物とは生物を動物と植物に分けていた当時、植物の中で花を持つ顕花植物以外のものの総称である。具体的には、シダ植物、コケ植物、藻類、菌類、バクテリアなどが含まれる。似た用語に下等植物があり、これは維管束を持ち、体制が複雑なシダや種子植物を高等植物と呼ぶのに対し、それ以外をさす総称である。いずれにしろ、系統の異なるものの寄せ集めであるため分類群名として現在ではほとんど使われないが、時々科学史的な意味合いで、また便利な総称として用いられる。なお、隠花植物の研究が顕花植物のそれに国内外を問わず遅れていることは論を待たない。顕花植物は衣食住の材料として不可欠である他、大きくて美しく、その情報を集め、区別し、整理することが優先されるのは当然である。分類学黎明期に、役にも立たず、小さくて地味で鑑賞の対象にもならない隠花植物へ興味を持つ者は宗教的使命を持つ者か人のやらないことをやりたがる変人だったと考えても不思議ではない。

#### 植物研究雑誌に発表された隠花植物の論文

本誌に最初に掲載された隠花植物関係の論文は第1巻2号(1916)に掲載された牧野富太郎によるシャジクモ類(藻類)についての報告である(図1)。創刊号から第90巻6号まで、に掲載された論文の研究対象になった分類群の割合を調べると、種子植物が当然のことながら一番多く、約4分の3を占め、残りが隠花植物である。隠花植物の内訳はおおよそ地衣類(6%)、コケ植物(5%)、シダ植物(5%)、地衣類を除く菌類(4%)、藻類(4%)となっている(図2)。論文数の多い著者を見ると、地衣類(467編)では朝比奈泰彦(255編)、黒川 遼(84編)、佐藤正己(64編)となり、半数以上が朝比奈泰彦により執筆されている。コケ植物(409編)では井上 浩(94編)、服部新佐(68編)、野口 彰(39編)、シダ植物(408編)では

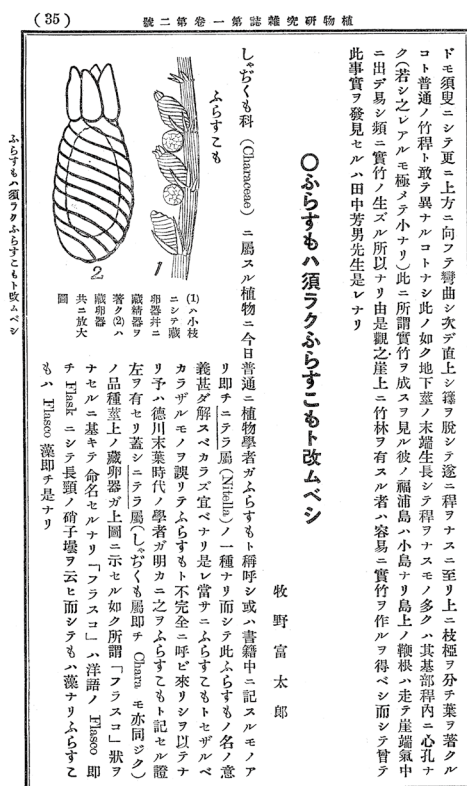


Fig. 1. The first report on the cryptogam (Makino 1916) in *The Journal of Japanese Botany*.

図1. 植物研究雑誌における隠花植物に関する最初の報告(牧野 1916)。

伊藤 洋(130編)、百瀬静男(54編)、田川基二(25編)、地衣類を除く菌類(374編)では小林義雄(137編)、平塚直秀(34編)、本郷次雄(32編)、藻類(369編)では千原光雄(133編)、田中次郎(40編)、梅崎 勇(29編)となっている。いずれの分類群でも分類学的研究を推し進めた名だたる研究者の顔ぶれとなっており、植物研究雑誌が隠花植物の研究に多大の貢献をしてきたことがわかる。ただ、年代別にみると1950–1970年代以降隠花植物の論文数が減少する傾向が見られる。これはおそらく各分類群の学会の創立による学会誌の刊行と国際誌への投稿数の増加が影響していると思われる。

#### 植物研究雑誌に期待されること

本講演の準備で本誌のバックナンバーを参照したが最も感銘を受けたのは第3巻2号に掲載され

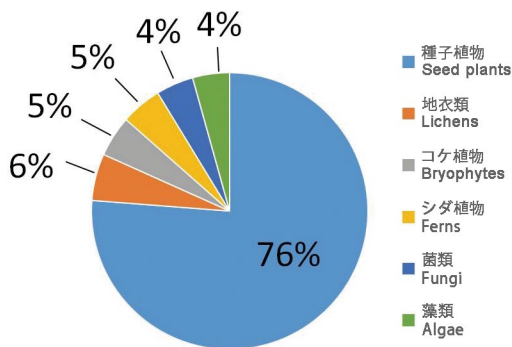


Fig. 2. Percentage of taxa treated as the subject in papers published during these 100 years in The Journal of Japanese Botany 1916–2016.

図2. 創刊号(1916)から第90巻6号(2016)までに掲載された論文の研究対象になった分類群の割合。

た朝比奈泰彦の「薈軒獨語(其一)」である。日本で隠花植物の研究がようやく緒についた頃の状況を冷静に分析し、将来への方向性を示している。著者の意思と覚悟が文面から伝わってくる。また、これは本誌のあり方を示すとともに特色の一つである専門家とアマチュアの良い関係を示唆しているように思える。以下、少し長くなるが一部を引用する。なお、かく言わしめたのは津村の支援によって本誌出版の財政的基盤が安定していたことが大きく影響しているのだろう。「唯私が常に我国の植物学で物足らぬ感じのするのは顕花植物に比して隠花植物に関する知識が大に後れて居ると云うことである、(略)、其原因は何處にあるかと云うに其一大原因と私が思うことは植物愛好者(専門家にあらざる)が専門家に依頼し過ぎたことである、(略)、何とか目鼻を付けるのが日本人の誰かの義務であると思う、それには素人の植物愛好者(私も其一人であるが)が将来出現すべき専門家の為に下拵えをして置くことが最も急務でそれにはなるべく多数の完全なる標本を蒐集し異同を辨じ産地習性を明らかにして置きいざと云うときこれを持ち出せば吾国「フローラ」の基礎は立所に成立すると思うのである、(略)、或人は吾国の隠花植物の如きものを今更コツコツやっても何になるかそれよりも標本を無暗に集て之を海外の各専門家に送り其鑑定を受ければ足ると云う議論をやるのである、(略)、現に吾国が顕花植物でも外人崇拜の苦き経験を嘗めつゝあるのである、これを再び隠花植物でもやって見ることは真平御

免である、(以下略)(演者現代語訳)。

#### 引用文献

朝比奈泰彦 1926. 薈軒獨語(其一). 植物研究雑誌 3: 27–28.

牧野富太郎 1916. ふらすもハ須ラクふらすことも改ムベシ. 植物研究雑誌 1: 35.

(国立科学博物館植物研究部)

#### □講演 5. 邑田 仁: 植物研究雑誌を読む Jin MURATA: Reading *JJB* for Inspiration

2016年3月29日に植物研究雑誌の新webページが公開され、3年間の購読者限定公開期間が過ぎた全ての記事がPDFで読めるようになった。また、これに伴い、キーワード、論文タイトル、著者、発刊年、巻号により検索がかけられるようになった。書棚に研究雑誌のバックナンバーを並べている自分にとっては、ちょっとその有り難味が薄れた感じがしないでもないが、これを機会に植物研究雑誌がいっそう広く利用されるようになることを望む。

私は1975年に大学院に入り、群馬県の神流川流域の植物調査が研究課題となった。しかし、植物標本も作ったことがなければ、論文もほとんど読んだ事がないという有様で、どうすれば「研究」ができるのか見当もつかず、研究室で何が行われているのかを眺めているという状態だった。そんな時先輩から、研究雑誌を読むと面白いという話を聞いた。「読む」には二通りの読み方がある。必要に迫られて目的の論文を読む場合と、特に目的を設定せず本を読むように読む場合であるが、とにかく端から読んでみると、研究成果ばかりではなく、先人のいろいろな着想を知ることができて面白いし役に立つ、ということであった。

私は勤勉な学生ではなかったもので、第1巻から通して読むということはしなかったが、それでもあちこち拾い読みをして、昔の大先生の仕事を自分なりに理解することができた。また、標本室に時々顔を出す先生方と話をするきっかけともなり、分類学の世界でやっていくことに大いに役立ったと思う。研究雑誌は長らく毎月発行を続けており、新たな記事を待つ事も楽しみであった。折に触れて東京大学の総合研究資料館(現東京大学総合研究博物館)でお目にかかった原 寛先生は雲の上の人であったが「研究雑誌の巻号は昭和の